

キーワードは笠間焼・スケボー・道の駅に栗！ 新旧の地域資源が織りなす相乗効果的な未来図

日本遺産認定で始まる笠間焼の新章

飛鳥時代中期(白雉^{はくち}2/651年)の建立と伝わる日本三大稲荷の一つ《笠間稲荷神社》(以下、笠間稲荷)も。現在に至るも茨城県内で最も多くの初詣客・参詣客を集めるこの神社の存在を、笠間の地における精神的バックボーン^①の代表とすれば、近世以降の笠間の産業面の顔として、農業とともに常に代表してきたのが笠間焼だ。そんな笠間焼に今、変革期が訪れようとしている。

きっかけは令和2(2020)年1月に近隣の窯業産地・益子(栃木県益子町)と共同申請した『かさましこ^②兄弟産地が紡ぐ焼き物語』(以下、かさましこ日本遺産)という名称のストーリーが、同年6月、文化庁より『日本遺産』に認定されたことにある。

「かさましこ日本遺産の『かさましこ』は、笠間と益子を合わせた造語です。笠間市と益

子町は栃木県茂木町を挟んでほぼ20km圏内に位置しており、窯業産地として昔から常に、近隣の良き仲間、良きライバルとして、表裏一体の関係を保ちながら推移してきました。

さらに近年では、東京・秋葉原を起点に笠間と益子を結ぶ高速バス《関東やきものライナー》が運行されるなど、窯業産地として密接な協力関係を構築しています。そんな経緯もあり、以前から日本遺産への申請を単独で企画されていた益子町さんから改めてお声掛けいただき、共同で申請することになったのです。

良質な粘土を産出する笠間と益子を含むエリア一带は、素朴な焼き物の生産が古代から自然発生的に行われていました。さらに中世には共通の統治者(宇都宮氏やその流れをくむ笠間氏など)が領有していた歴史があり、同じ文化圏を構築していたともいえます。それが江戸時代の幕藩体制の成立によつ

やまぐちしんじゅ
 山口伸樹
 笠間市長



て、笠間は笠間藩に属し、益子は幕府の天領や旗本の知行地になるなどしたため、両者は別々の道を歩むようになりました^③

そう語るの山口伸樹^{しんじゅ}笠間市長だ。山口市長は1市2町(旧笠間市、友部町、岩間町)の合併により、平成18(2006)年3月に誕生した新笠間市の初代市長に就任(同年4月)。4期15年目となる今日まで一貫して、市政をけん引してきた。その間、常に心掛けてきた課題の一つが、地場産業を代表す



取材の出発点は日本三大稲荷・笠間稲荷神社の鳥居前町

る「笠間焼の振興」であり、実際さまざまな振興策を実行してきた。

「笠間が江戸時代中期に窯業産地としての地位を確立し、笠間焼とも呼ばれるようになった始まりは、久野半右衛門という人が、信楽焼の陶工・長右衛門の指導で窯場を開いたことにありました。また益子焼がそれより少し遅れ、やはり江戸時代に確立されるようになったきっかけは、笠間で修業した陶工が、益子で窯場を開いたことにありました。



桜の名所が多い笠間では《市の木》も桜(愛宕神社鳥居前)

かさましこ日本遺産のタイトル通り、笠間と益子は信楽焼を親に持つ、まさに兄弟産地なのです(山口市長)

笠間焼と益子焼は窯業産地としての基盤を互いに固めた18世紀以降も、日用雑器(食器類)を中心に切磋琢磨しながら、産地としての成長を続けていく。その過程で培った産地としての笠間焼および益子焼に共通し、他の窯業産地と大きく違う特色は、「産地としての決定的な作風を創り上げることよりも、顧客の要望や時代の要請などに従って、良いと思われるものは何でも作っていいとする自由な雰囲気構築したところ」(山口市長)にあるとされる。

その結果、産地としての笠間と益子には現



在、合わせて約600人もの作家が在住することに変わった。これは全国的にみても稀有な状況とされる。自由闊達な雰囲気がかさましな志向を持つ作家志望者を引き付け、日用雑器だけでなく陶壁やタイル、オブジェなど、多様な作品を伸び伸びと生み出す原動力にもなっているのだ。

もともと笠間市では笠間焼産地後継者育成補助金制度や、茨城県産業技術イノベーションセンター・笠間陶芸大学校(陶芸学科2年制/研究科1年制)の卒業生に対し、市内での創業までの助走期間用の安価な賃貸施設の開設(笠間陶芸修行工房スタジオand)、笠間在住作家の海外進出支援を行うJAPANブランド育成支援等事業——など、多彩な振興策・支援策を実施してきた。

それに加え、かさましこ日本遺産の認定を



自由な作陶が学べる茨城県立笠間陶芸高等学校



国内外から集まる笠間陶芸高等学校の学生たち



ゴールデンウィーク名物・笠間の陶炎祭(笠間芸術の森公園)

契機に推進される取り組み（主体は笠間市関係団体と益子町関係団体による《かさましこ日本遺産活性化協議会》）では、ブランド力向上や観光振興、および地域振興全般と陶芸とを結び付ける多角的な施策・事業などが、これから展開されていくことになる。

世界中のスケートボード注目施設誕生

集客面での原動力の一つにもなる東京／笠間／益子を結ぶ《関東やきものライナー》が、新型コロナウイルスの影響で減便されがちなことは気掛かりだ。しかし、緊急事態宣言が段階的解除の方向性に向かいつつある現在

（原稿を作成している3月半ば時点）、今年のゴールデンウィーク（以下、G・W）には、笠間焼最大の恒例イベント《笠間の陶炎祭（4月29日～5月5日）》も開催の予定で、期待が大きい。

「昨年の《笠間の陶炎祭》は残念ながら、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。しかし、今年は3月20日に国内最大級のスケートボードパーク（笠間芸術の森公園スケートパーク）が開園の予定で、9月16日には笠間市にとって初めての《道の駅かさま／令和元年度重点「道の駅選定」もオープンする予定です。

新型コロナウイルスの感染状況にもよりますが、さらにその間のG・Wに《笠間の陶炎

祭》が2年ぶりに開催されれば、かさましこ日本遺産と絡めた笠間焼のさらなる振興と合わせ、今年春から秋にかけての笠間は、まさに大きなにぎわいに包まれるものと希望を膨らませております」（山口市長／※取材は令和3年2月17日）

山口市長の言葉にある国内最大級のスケートボードパークとは、3月20日開園、4月3日に一般公開される《ムラサキパークかさま》（取材後の3月2日に株式会社ムラサキスポーツが企業命名権・ネーミングライツ取得）を指すが、この施設は今、プロ・アマを問わず、世界中のスケートボーダーたちから熱い注目を集めている。

質・量ともに日本最大級の施設という意味もあるが、今夏開催の東京オリンピックで初めて五輪正式種目になったスケートボードの優勝候補筆頭・アメリカスケートボードチームが、《ムラサキパークかさま》の完成間近な笠間市を事前キャンプ地に選んだからだ。

「アメリカスケートボードチームの事前キャンプ地誘致活動を開始したのは令和2年11月からです。12月には早速、アメリカ五輪委員会日本代表駐在員による現地視察やUSAAS（アメリカスケートボード協会）のバーチャル視察が行われ、今年1月には仮の合意を得るところまでいきました。誘致活動開始からわずか2カ月でそこまで進んだので、うれしい半面、大変驚きました」（山口市長）

USAASとの基本合意書締結については、



《ムラサキパークかさま》は世界基準のスケートボードパーク

山口市長への取材後、4月8日にオンラインで実施されることが正式決定した。

それにしても、この間の経緯はまさに「驚くほどの巡り合わせ」(山口市長)に恵まれた。平成26(2014)年に《笠間の陶炎祭》の開催場で、笠間陶芸大学校も立地する県営笠間芸術の森公園の未開園地の整備に関する要望を、笠間市が茨城県に行ったのが発端だった。その協議をしている過程の平成28(2016)年にも、スケートボードが東京五輪の正式種目に採用されることになった。

そこで茨城県との協議の結果、笠間市では五輪後のブームも予測し、国際基準に準拠したスケートボードパークの建設案を企画。日本スケートボード協会に支援を依頼すると

もに、企画を進めていく過程で、後に企業命名権を獲得するムラサキスポーツとの連携も決定、平成31(2019)年1月の着工に至った。だが「その時点では竣工が東京オリンピック開催の翌年(令和3年)になることが明らかだったため、事前キャンプ地誘致への発想は全くなかった」と山口市長。そうこうするうち、令和2年に入ってから新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、東京オリンピック・パラリンピックは1年間の延期が正式決定(令和2年3月30日)されることになった。

「それでもまだ、どこかの国の事前キャンプ地に名乗りを上げようというような発想はありませんでしたが、令和2年10月、茨城県から『アメリカスケートボードチームの事前キャンプ地が決まっていられない』との情報もたらされます。そこで翌11月から県や日本スケートボード協会などとの連携で誘致活動を始めたところ、トントン拍子で決まってしまったのです」(山口市長)

《ムラサキパークかさま》では前述のように、今年3月20日のオープニングセレモニーとともにオープニングイベント(3月30日まで開催の《アクションスポーツ・アートフェス2021 in 笠間》)が始まり、ゴールデンウィーク直前の4月3日からは一般公開される。

「関東やきものライナー」の減便や、昨年

道の駅誕生がもたらす各種の相乗効果

「関東やきものライナー」の減便や、昨年



《道の駅 かさま》は地域振興・防災などの拠点ともなる重点「道の駅」

の《笠間の陶炎祭》の中止など、新型コロナウイルスには振り回され通しの日々でしたが、スケートボードパークに関してはオリンピックの開催延期により、アメリカスケートボードチームとの連携関係がその間に生まれましました。運が良かったのか悪かったのか表現に困りますが(笑)、このまま新型コロナウイルスには収束に近づいてもらい、G・Wの《笠間の陶炎祭》や7月開幕の東京オリンピックはぜひとも開催にこぎ着けてほしいというのが、私たちの偽らざる気持ちです」(山口市長)

また、アメリカスケートボードチームとの交渉の過程では、昨年12月、在日フランス大



交通の要衝・笠間にはJCTの他に、三つのICとスマートICが存在(友部スマートIC付近)



笠間への企業進出が順調な最大要因は交通至便な環境

クかさま》は日本を代表する国際基準のスケートボードパークであることが、改めて証明されたといえる。

それからもう一つ、山口市長の発言にあった9月16日開業予定の《道の駅かさま》については《関東やきものライナー》などの高速バスや、常磐線の特急が停車するJR友部駅、JR水戸線・笠間駅からの市内循環バスとの連携による交流客の増加が期待される。

「笠間市は実は交通の要衝です。例えば東京駅からは、常磐線特急で市役所本庁舎の最寄り駅・友部駅まで70分強で到着します。市内には常磐自動車道の岩間ICと友部スマートICがあり、常磐自動車道と北関東自動車道をつなぐ友部JCT、さらに北関東自動車道には友部ICと笠間西ICがあります。秋葉原と笠間・益子を結ぶ《関東やきものライナー》は、常磐自動車道と北関東自動車道を経由しますが、秋葉原駅〜笠間駅間の所要時間は約100分です。

そして《道の駅かさま》は、国道355号沿いに建設中で、笠間芸術の森公園や笠間稲荷からも近い好立地にあります。県外からのアクセスは、現状では友部駅からバスに乗り換えていただくか、北関東自動車道の友部I

Cで降り、国道355号で来ていただく形になります。しかし、北関東自動車道の笠間PAにはスマートIC(仮称・笠間PAスマートIC)の設置が決まっており、早ければ令和7(2025)年度には開通の運びとなります(山口市長)

笠間PAスマートICが令和7年度に完成すれば、交通の要衝・笠間市の実力はより一層上がるが、今年9月の《道の駅かさま》開業の段階においても、市内交通の渋滞緩和への効果は期待できる。

笠間焼・スケボー・道の駅・そして栗

《道の駅かさま》には高速バスや市内循環バスの停留所とともに、シェアサイクルなどの拠点も設置される。車や高速バスで訪れた観光客には、まず道の駅で買い物を楽しんでもらう。さらにここから、笠間焼の工房が集中する《やきもの通り》や笠間芸術の森公園(茨城県陶芸美術館、笠間陶芸大学校、ムラサキパークかさまなど)方面へ、シェアサイクルや市内循環バスなどを活用したパーク&ライド方式で訪れてもらおうという仕組みづくりも準備中だ。

「《道の駅かさま》は9月16日の開業予定ですが、9月は日本一の生産量を誇る笠間の栗の旬の季節の始まりでもあります。同時に県内トップクラスの収穫量を誇る小菊も7月から9月までが出荷の最盛期なので、この時期

使館を通じてFFRS(フランスローラーズケートボード連盟)から「笠間でフランススケートボードチームの事前キャンプを行いたい」とのオファーがあった。それを受けて早速誘致活動を開始。こちらの案件も今年2月のフランス大使館担当者による現地視察を経て、4月中にはオンラインでの基本合意書締結が行われることも取材後に決定している。

世界の強豪・アメリカ代表チームとの締結に加え、次回オリンピック(2024年パリ五輪)開催国であり、スケートボード競技に国を挙げ力を入れているフランスからもオファーのあったことにより、《ムラサキパー

笠間市

市 政 ル ポ

(茨城県)



《ゴルフのまち笠間》では小学生のスナッグゴルフが盛ん

にも間に合います。

道の駅の魅力は何といっても地物の農産物や海産物ですよね。笠間の場合は農産物に集中しますが、特に栗については、笠間が質量ともに日本一の産地なのだということをアピールする絶好の機会であり、《道の駅かさま》がその最大の発信地にもなるのではないかと期待しております(山口市長)

笠間市では平成28(2016)年度から開始した、地方創生応援税制を活用する「遊休農地等を活用した笠間の栗生産拡大事業」の実施を皮切りに、笠間市が産出する栗および栗製品の品質向上、生産拡大を図ってきた。

もともと農産物の南限と北限が混交する常陸国(茨城)は古来「食の宝庫」とされてきた。



通称《やきもの通り》にそろう多彩な笠間焼ギャラリー

笠間市もリンゴの南限、栗やミカンの北限とされ、多彩で良質な米・野菜・果実の産地として知られている。中でも日本有数の産地とされてきた栗に関しては、名前が知られている割には一次製品としての出荷が中心の時代が長かったため、収益の問題などから後継者難、離農者の増加などに悩まされてきた経緯がある。そうした反省から、近年では二次製品、特に和菓子・洋菓子で使われるペーストの開発・生産と出荷が順調に伸びつつある。

《道の駅かさま》という最新の展示・販売場を得ることで、今後は六次産業化への気運も盛り上がっていくのではないだろうか。

また《道の駅かさま》には「笠間焼は販売しない方針が打ち出されている」(山口市長)の



質・量ともに日本一の呼び声高い笠間の栗

も注目される。置けば必ず売れるはずだ。しかし、道の駅で買わず市内に立地するギャラリー(やきもの通りなど)や窯場へ直接行ってほしいという深慮からの方針で、市内在住の300人近い作家たちの生活を守るための措置でもある。

全国の都市に共通の人口減少問題や新型コロナウイルス禍への対処などの悩みは、笠間市においてももちろん同様だ。

しかし、笠間焼や栗栽培などの伝統的な産業の振興と、スケートボードや道の駅などの新風景が混然一体となり、相乗効果を発揮し合いながら伸びようとしている笠間市の現況は、明るい兆しに縁取られている。

(取材・文：遠藤隆／取材日令和3年2月17日)